九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑前国怡土庄故地現地調査速報

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1520164

出版情報：1999-12-31. 服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：

前原市末永・王丸地区

学部4年　三　村　講　介

調査メンバー：服　部　先　生
博士3年　森　　哲　也　　学部4年　三　村　講　介
学部3年　松　尾　弘　毅　　学部3年　森　谷　史　浩

調　　査　　日：1996年7月28日（日）

調　査　担　当：末永地区…松尾、王丸地区…森谷

お話を聞いた方々：末永地区…島　崎　精　一さん（昭和12年生まれ）
中　村　善　美さん（大正10年生まれ）
松　田　　侃（ただし）さん（昭和6年生まれ）
王丸地区…家宇治　　猛さん（昭和5年生まれ）

〔結　果〕

①末永・王丸地区にしこ名はないということであった。それぞれの田を呼ぶ場合は、小字名の○番地といったように番地によって区別しており、地元の人にのみ通用する名前は特別ないとこのとである。

②水利についての話

末永地区…おおいで（大井手）
上流 あんぞうじいで（安蔵寺井手）
くるまいで（車井手）
下流 ふちわもといで（渕曲もと井手）…河川改修前は桑ノ本、六の坪の田に水をひいていた。現在はない。

現在この3つの井堰から田んぼの水を引いている。

大　井　手…末永・王丸地区共用である。この大井手のかかりは末永分だけで20町あり、大きなものである。おそらく王丸でも20町ぐらいかかっており、あわせると40町ぐらいであろうか。この20町分というのにはため池（新溜池）の水と、大井手の水をあわせてということらしい。

安蔵寺井手…昔、この辺りに安蔵寺という寺があったからではないか。詳細不明。

☆1：干ばつの時の水利慣行→高祖と末永の間にある（1週間に1回、24時間〔19～翌19時〕）。

昔（明治のころ）、安蔵寺井手から水をひく際に、西堂（にしのどう）集落と争って裁判になった（末永ばかりが安蔵寺井手から水をひくから）。この裁判は長崎の控訴院まで持ちこまれたが、結局、末永の方が分が悪いことになった（この時の史料は末永には存在しない。西堂に行けばあるだろう）。

この裁判で末永の方を高祖が応援し、西堂の方を井原が応援していた。その時のお礼のような形で、末永がひいている水を高祖にわけるようになった。干ばつの時は1週間に1回、末永がもらうべき水を高祖にあげるようにしている。

☆2「あんぞうじいで」における水利慣行→末永と西堂集落におけるもの

普段は分水を使って、両者で半分ずつ水をひいている。干ばつなどで、取水量が減った場合、両集落の役員による協議がもたれ、24時間交代で水をひくようになる。

③「せんじょう」というため池について←福岡市と前原市との境界あたりにある。末永集落が管理している。

○干ばつの時には、このため池の水を抜いて水を川に流す。その水のことを「こうち水」と呼ぶ。

○この「こうち水」を末永が取水する時には、上流の川原、王丸地区に相談しなければならない。（末永が「こうち水」をとるといって「こうち水」や（普通に流れている）川の水まで一緒に取水してしまうから、必ず相談する必要がある。）

○「せんじょう」は山の上にあり、ぬいた水が川に流れこみ、あんぞうじ井手でその水を取水できるまで時間がかかる（朝、水をぬいても、午前中に井手までその水がこない）。

○「せんじょう」の水は干ばつがなければ、1年に1回水ぬきをするかしないかぐらいのものである。しかし、2年に1回は掃除のため、必ず水をぬく。

④「いものうら」というため池について←130年ぐらい前にできたと思われる。

⑤四ノ坪付近の河川改修は平成4年ぐらいになされた。新溜池は平成5年ぐらいに作られた。

⑥ ○古屋敷のところ、川べりの土地→「てんじん森」耕地整理の時も田にしなかった。

○古屋敷のところに、石窟のようなものがあったが、耕地整理の際の調査では屋敷跡も出土品もなかった。

○また、ここには、江戸期までは宇治神社があったところがあり、そこに黒田長政が立ち寄って、神殿の材木を寄贈したという史料が現在も残されている。

○旧宇治社跡すぐ横の河原で「おしおいとり→千度潮井（せんどじおい）」を行なっている。7月の田植えが終わった頃にする。一般家庭の平安・円満、田の豊作を祈って行なう。本当に千回も砂をとるわけではないが、そのつもりでやる。昔は家中総出でやっていた。

⑦『怡土荘史料』に出てくる「観音堂」（昔は地蔵堂）の存在→現在、毘沙門天と一緒に祭られている。場所は「いものうら」のすぐ横。正月3日には小さなお祭りがある。

「観音免田」の存在はわからなかった。

⑧末永地区内には、庚申様、秋葉様（宮）、馬頭観音、薬師堂、あわしま様、地蔵様が祭られている

⑨その他、詳細不明ながら、備中のところにあった「おにぐら」（石をつんだ古墳？）向のところにあった「かいづか（きょうづか）」（「いものうら」から山手に上がってすぐのところ）

⑩松ケ裏（浦）、裏山田、深原（深浦か）の辺りの山→「建（立）山たてやま」という呼び名がある。

⑪松ケ裏あたりは、古代、怡土城の瓦が作られていたところで、その瓦も出土している。ひょっとすると「まつがわら」がなまって「まつがうら」になったのかもしれない。

⑫深原（浦カ）、狐尾のあたりの山林→「水のみ場」「大久保」「にぎりくぼ」という呼び名がある。深原のところに、昔、銅を掘ろうとしたところがある（採算がとれないので、すぐにやめた）。

⑬桑ノ本のところに、「かけづか」というものがあった。たたりがあると言い伝えられていたが、今はもうない。このあたりの田は、昔、王丸地区の人が米を作りにきていたが、場所が遠いので、土地を交換した。

⑭末永・高祖・王丸地区の境界あたりの山中に宇治神社の持ち山「お宮の山」がある（3地区の境界が接するところ）。

＜王丸地区＞

①井手（上流から）上井手（かみ・うわ）、中井手、車井手、河原田井手

②白木神社のすぐ横を流れる河は公式には荻園川と呼ばれ、「小林の川」という呼び名もある。この川の上流の山林の呼び名「山の神」「おみなずなし（尾水無）」「くさのだに」「さくらのたに」。白木神社の白木は新羅がなまったものと言われている。糸島半島の西の浦にある神社の祭神と同じ。

③荻園川と県道が交差するところにかかっている橋→「大こうちのかみ橋」

④王丸地区には観音堂と庚申様が祭られれいる。

⑤石佛いしぼとけという字名の由来らしきもの→道端に石が２つ並んでいる？

⑥王丸山の頂上→「こまのかしら」という呼び名がある。

⑦王丸氏について

○県道沿いに五輪塔があり、「王丸氏発祥の地」という石碑がある。８月16日には「王丸様ごもり」といって地区内の人々がみんなこの石碑のところに集まる。これといった儀式はなく、ただみんなで集まって弁当を食べながら話をしてガヤガヤするだけである（弁当の仕込みを当番で地区内をまわしている。担当が４人ぐらいいる）。

20年ぐらい前から、王丸氏の子孫だという人もやってくるようになった。そこで立派な石碑が立ったそうである。その人たちは久留米あたりに住んでいるらしい。

○加布里のあたりに王丸姓の人たちがいるそうである。

福岡市内にも王丸さんが経営する病院がある（関係があるかはわからない）。

⑧前田→「寺の下」、石原→「堂の下」、小林→「山の神」という呼び名

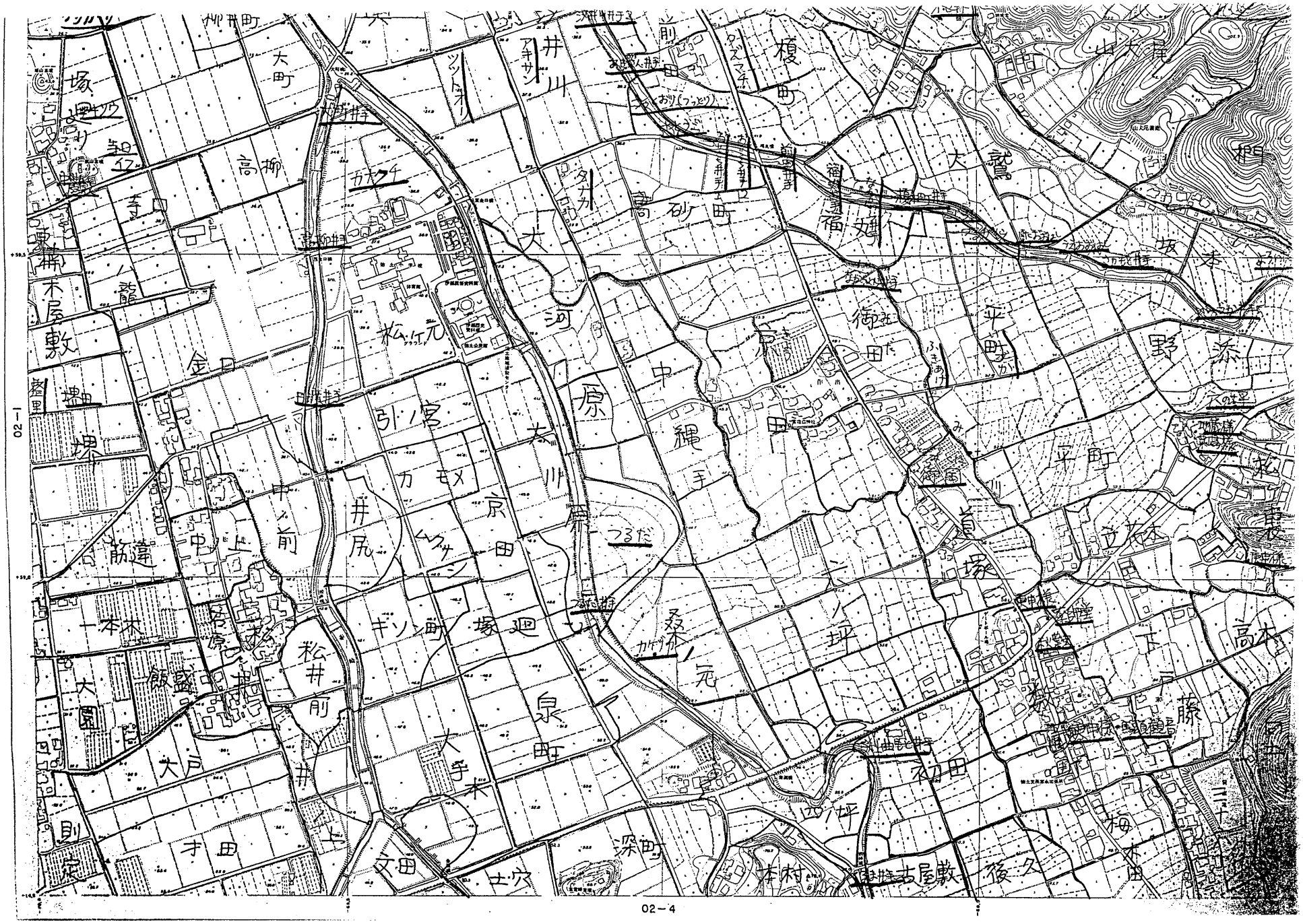
〔感　想〕

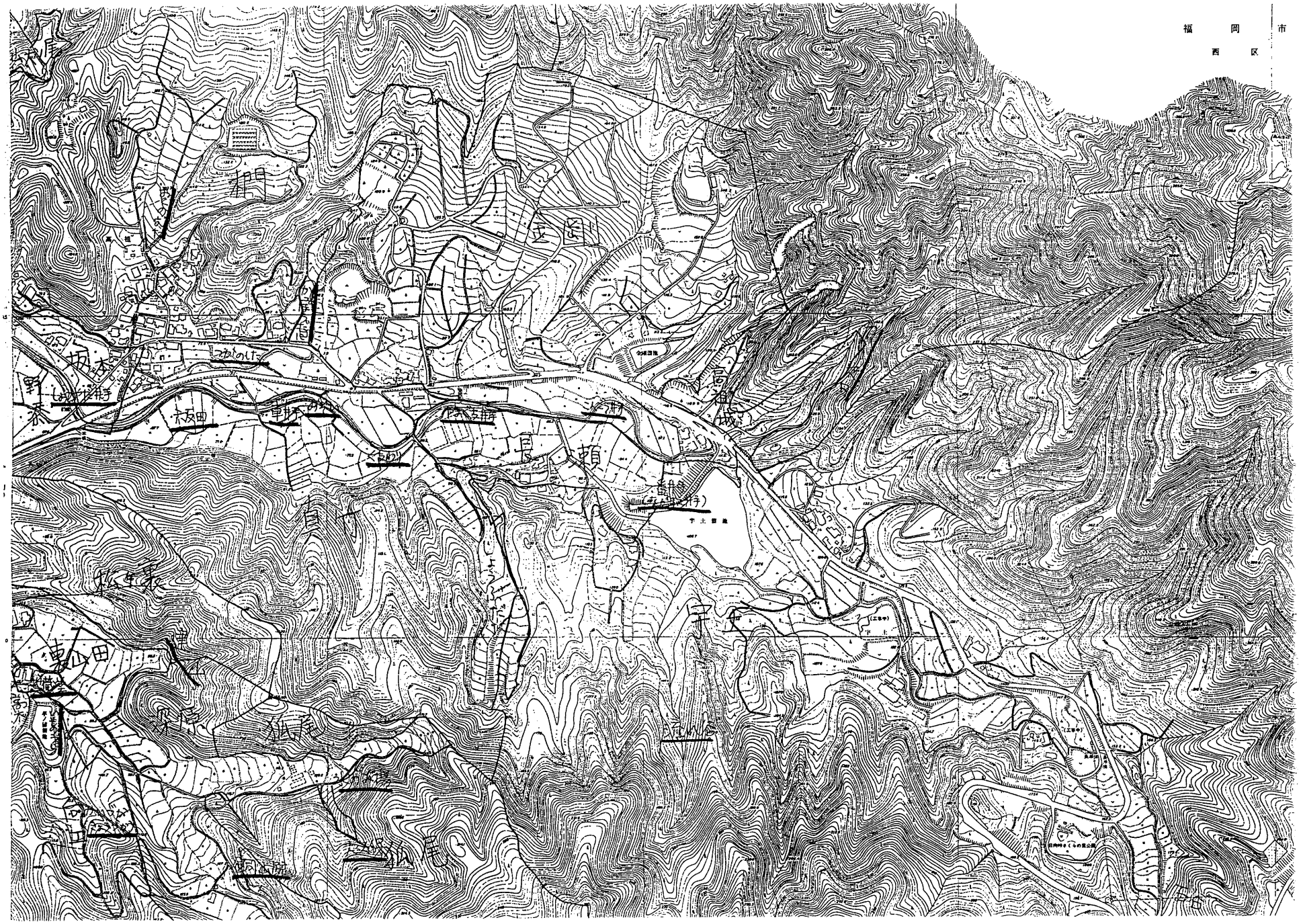
末永の島崎さんとは電話で話をした時に、「しこ名はありますよ」と言われていたので、期待して行ったのだが、それは小字と勘違いされたようで、結局、しこ名は存在しなかった。このあたりには、どこもしこ名は存在しないようである。そのかわり、水利についての話は、他に呼んでいただいた中村さん、松田さんから詳しく聞くことができ、多くの成果が挙がった。とてもおもしろい話が聞けた。

王丸の家宇治さんは、前日に急に訪問をお知らせしたために、あちらも少しとまどっておられた様子で、末永の時ほどうまく話がはずまなかった。まあ、最低限聞くべきことは聞けたと思われる。王丸氏に関する話はちょっといい話を聞いた。お祭りのようなことまでしているとは思わなかった。後で、石碑を見にいったが、地誌に載っていた墓碑銘はいくら探しても見つからず、残念だった。全体的には、予定通り、末永・王丸地区の両方で話を聞くことができ、計画をたてた自分としては安心し、よかったと思う。ただ、末永で条里制のことに関することが全く判明しなかったことや、王丸での王丸氏のことについてもっと詳しいことがわかれば、と当初考えていたことがうまくいかなかったのは残念である。これらのことはやはり歴史に詳しい方に聞かなければ無理のようである。

宇治神社の階段はきつかった。しかし、上からの眺めはよく、境内はすずしかった…。

大場山
こまのかい
02-4


大町
高柳
高砂町
大鷲
福嬢
坂本
平町
野添
金口
引宮
中原
縄手
京田
井尻
カモメ
ギソ
坂迫
泉町
大手本
上
文田
土穴
深町
本村
古屋敷
後久
梅本
初田
立本
高本
藤
一本木
大園
飯盛
寸田
則定
筋違
堀
敷
寺
松元
桑ノ元
つるだ
御田
平町
02－4


福岡市
西区
立花川
坂本
木坂田
東小田
弘尾
弘尾川
千里
千里川
千里ダム
千里貯水池
千里ダム
千里ダム
千里ダム